

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	第 2 回高松市創造都市推進懇談会（U 4 0 / 第 5 期）
開催日時	令和 3 年 3 月 1 5 日(月) 1 8 時 3 0 分～ 2 1 時 0 0 分
開催場所	高松市役所 1 3 階 大会議室
議 題	（ 1 ） 高松らしさとは何か？みんなで考えよう！
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	穴吹会長、中村かおり副会長、湯川副会長、大石委員、 三木委員、棟近委員、若林委員、大崎委員、中村香菜子委員、 西森委員、林委員、松井委員、宮武委員
市職員 U 4 0	上原、四宮、藪下、齊藤、三好、平岡、佐々木、香西
事務局	宮脇補佐、三浦係長、松下主任主事
傍聴者	2 人 （定員：5 人）
担当課及び 連絡先	産業振興課 創造産業係 8 3 9 - 2 4 1 1

審議経過及び審議結果

1 開会

【会長】

今日は「高松らしさを考えよう」という議題を設定させていただきました。一方で、まだまだメンバー間の関係を深める時間を重視したいと思いますので、グループワークを中心に進めさせていただきます。2つのグループワークの間に情報のインプットの時間も設けさせていただいております。

最初に「高松市に住んでいる」、「高松市で活動をしている」皆さんの生活を共有するためのグループワークを30分間させていただきます。

その後、30分ほどで「先行している世界の都市」というテーマとして、まちづくりという点で先行している世界の2つの都市をご紹介します。

そしてもう一度、ワールドカフェスタイルで「自分たちが住みたくなるまち」とはどういうものなのかというところを深掘りしていきたいと思えます。皆さんリラックスしつつ、しっかり議論していただけたらと思えます。

審議経過及び審議結果

また、今日も香川大学の創造工学部の学生が傍聴に来てくれています。もしよければ、是非、グループワークの中に参加していただいて、御意見を聞かせていただけたらなと思いますが、皆さんよろしいでしょうか。

(拍手)

【会長】

ありがとうございます。早速、議事を進行させていただきます。それでは、グループワークの進行は、他の委員の方にお任せしたいと思います。よろしくお願いいたします。

2 高松らしさとは何か？みんなで考えよう！

【委員】

今日のテーマは「高松らしさを考えよう」です。高松らしさって言うと、私だったら、うどんや骨付き鳥、瀬戸内のきれいな海といった観光事業の表紙みたいなものを思い浮かべてしまいましたが、同じ高松に住んでいても、見ている視点は人によってそれぞれ違うので、今日は、高松市に住んでいる又は活動している皆さんの活動や生活、暮らしの中で、高松の良いところを2色用意してくれているポストイットの黄色の方に書いてください。例えば、子育て中の人だったら、学校関係のこととかを求めるかもしれないし、メディア関係のことで高松のニュースとかについて思うかもしれないです。もう1つの青色のポストイットに、もっとこうなったらいいなと思う伸びしろがあるところを書いてください。自分が思うところでもいいので、自分の暮らしの中で、高松で暮らす皆さんが思う良いところと伸びしろがあるところを書いていってください。

(各テーブルで高松の「良いところ」と「伸びしろ」について意見出し)

【委員】

書いた人から前にあるホワイトボードに貼りに来てください。良いところをばっくと見てみると、「気候がいい」、「コンパクトシティ」、「人やお店がお洒落で今風」、「レトロで古風なところが混ざっている」、「ランチやカフェが多い」「みんなどこかにつながっている」、「自然・島に行き放題」、「北に行け

ば海、南に行けば山、温泉」、「お店、おいしいお店がたくさん」、「うどん」
「県外へのアクセスが便利」といった意見が見られます。

一方で、伸びしろがあるところとして多いのが交通関係として、「高速道路が
まちなかから遠い」、「バス・私鉄のアクセスが良くない」、「車の運転のやり
方が悪い」、「車が怖い」「駐輪場、公共交通機関が少ない」などです。あと
は、行事やエンタメ関係として、「若い子が楽しめる場所が少ない」、「アーテ
ィスト・クリエイターの活躍する場」などです。また、「昼から飲んだら、白い
目で見られる」といった意見もあります。

この中で、「支援」と一言だけ書いてくれているのですが、説明していただい
てもよいですか。

【委員】

いろいろな支援がある中で、見えていないところまで届く支援があるかどうか
ということです。孤独だったり、見えていたりするところには届いているかもし
れないですが、見えないところや人にはできていないと感じています。

【委員】

孤独だったり、「私、困っています」と見えていたりする人は助けられている
かもしれないけれど、手を挙げられない人への支援がないということですね。

私は、I K E Aがないと書いたのですが、私自身は、I K E Aに行ったこと
がないのですが、神戸から来た家族はI K E Aがないことについてすごく話が
出ます。私としては、特段、不便さを感じてないのですが、結構、思っている人は
多いみたいです。

あと、「居住区に偏り」というのは、どういうことでしょうか？

【市役所U40】

住んでいる所には人がいっぱいいるのですが、逆に過疎地が広がっていて、開
きがすごいと感じています。

【委員】

学校とか特に、がらんがらんの学校とぎゅうぎゅうで一杯の学校があるという
のは感じますね。このように、すごくたくさん意見が出てきました。ありがとう
ございます。以上が、私たち、U40の皆さんが考える高松についてのイメージ
でした。

それでは、次に、魅力的なまちづくりをしている、いろいろな都市やまちについてお話をしてくださるようなのでお願いしたいと思います。

(湯川副会長から創造都市の先行事例について発表)

【委員】

それでは、今のお話を聞いて、いろいろなことを感じたり、疑問に思ったりしたことについて、各テーブル内の人たちで共有していただき、その後、発表していただきたいと思います。

(各テーブルで感想・疑問を共有)

【委員】

このテーブルで出てきたのは、貯蓄高が2位や3位だったりするので、そのお金を何かしら、うまく使えないのかなといった話で盛り上がりました。次の世代や新しい制度などにうまく投資がされたら、多分、高松はすごく強くなると思います。結局は、個人としての判断や意思決定によるのですが、全国でも上位の貯蓄のお金をうまく還元するように使うことができれば、広がりを作れないかみたいな話が出てきました。

【市役所U40】

お話を聞かせていただいて、もともとのベースであるもののレベルを引き上げるということに関して、すごく納得したところではあったのですが、新しいものをいかに根付かせていけるかということも、また、ある意味で底上げになるように感じましたので、そのあたりの新しいものと共生する方法とかがあるのかなと少し疑問に感じました。

【副会長】

プレゼンの中で御紹介したポートランドでも、新しい文化を受け入れることと両立できていると思います。ここにあるものもいいものと思うことと、新しい文化を取り入れていくということの両方があるまちは面白いですね。それをどういうふうにするかという話になると、まちの寛容力が試されているように思います。同じ人でつまないみたいな。「なんか、あそこのまちっていつも同じ人たちがつるんでいるようなまちなんだよね」みたいに思われた瞬間に終わりですよ

ね。そういう空気感みたいなものを我々が作らない。とりあえず、入口がとても広いみたいなメッセージ性を持つということは、非常に大事なのではないかと思います。

【市役所U40】

我々の班で話し合ったこととしては、高松市に関して、住んでいる人たちは住みやすいまちだというふうに感じてはいるのですが、なかなか、そのことに対して対外的なアピールということがうまくできていないという意見がありました。例えば、琴電のホームの椅子に座布団が敷いてあるのですが、それは近所の人を持ってきたりするものだったりします。そういうローカルな良さもあるのに、それをあまり対外的にアピールできていないのではないのかなということが1つです。あと、高松市自体が内側にあるものの良さというよりかは、もっと都会の洗練されたものみたいなことに対してのあこがれが強すぎて、自分たちが田舎者と思われたくないみたいな見栄があることで、なかなか、自分たちの持っている良さを対外的にアピールするようなメンタリティになっていないのかなといったことが話し合いの中で出ました。

【委員】

先ほどの「良いところ」と「伸びしろがあるところ」に当てはめながら、具体的なところまで考え出してくれているグループもいるようなので、このまま次に進みたいと思います。テーマは「自分たちが住みたくなるまち」です。自分たちが今までも住んでいて、これからも住みたくなるまちになるためにどうしたらいいのかということについて、最初のグループで20分間話をして、その後、席替えをしてまた20分間話をしていこうと思います。意見が出たものは模造紙に書いて残してってください。先行都市の話や「良いところ」と「伸びしろがあるところ」も踏まえながら、自分たちが住みたくなるまちについて、どうしたらいいのか話をして紙に書いてってください。

（「自分たちが住みたくなるまち」について各テーブルで意見出し）

【委員】

20分経ちましたので、模造紙はそのままで、1人だけ残ってもらい、他の3人は好きなところへ移動してください。移動した後は、残った人が模造紙に書いてあることを新しく来た人に説明してあげてください。そして、模造紙を見て思

ったことや、前のテーブルで出た話も交えながら、20分間話をしていただきたいと思います。

(席替え後、再度、「自分たちが住みたくなるまち」について意見出し)

【委員】

それでは、模造紙を見せていただきながら、テーブルごとに発表していただきたいと思います。

【テーブル1】

このテーブルの一連の流れをざっくりと説明しますと、高松市自体が住みやすいのはすごく分かっているけれど、一方で、加点ポイントがないよね、つまり、楽しいと感じられるところがないという意見が出ました。住みやすいまちって言われても、楽しいまちではないみたいなのところが問題なのかなっていうことで、若年層が逃げていくのは、そういった部分が要因なのだろうなと思います。要は、他の県や市町村には楽しい部分があると。じゃあ、その住みやすい以上にメリットがある部分をもっと付与していかないといけないなというところで、先ほどの先行事例の話にもあったとおり、その良さに気付くみたいなのところに、結局はなってくるように思います。例えば、屋台とか、やっぱり分かりやすく楽しさを可視化できるということは、すごく大事だなという話になっていて、見えない良さみたいなのところは、住んでいけばよく分かってくる部分であると思うので、分かりやすく楽しいと思える部分が意外とシビックプライドにつながりやすかったりするのかなという話になりました。

【テーブル2】

このテーブルでは、住みたくなるまちと住みやすいまちって、またちょっと違うよねみたいな話が出てきました。やっぱり住みやすくなるためには、生活の保障や給与面だったり、サービスだったり、資源だったりがとても大事だと思うのですが、外国人の方からすると、高松で住まないといけない理由がそんなに見当たらず、名古屋の方がいろいろと外国人のネットワークあっていいよねみたいなことも踏まえると、高松に住む理由ということについていろいろと考えるところがありました。高松に家族もいるし、仕事もあるし、人のつながりがあるから高松で住むというところがあると思うのですが、もし、それがなくなったときに、高松で住みたいのかって考えると、いや高松に残らないかもみたいな話にも

なると思うので、どこに住むかを考える上で個人の環境という観点は大きいのかなと思います。

県外から香川に来られた方とかのお話を聞いていると、だんだん香川が好きになっていく人が多くて、一番大事なところはやはり「ちょうどよさ」だということです。ちょうどよくて不便がないという、先ほどの話で出た加点ポイントがない部分も少しあるのですが、減点ポイントも意外と少ないところが、住みたくなるように感じるようです。私はずっと高松で生活しているのですが、ずっと住んでいると、それが当たり前みたいな日常なので、なかなか良さに気付けないところもあるのかなと思います。また、プレゼンの話からいくと、県外から来た人は、すごく香川や高松にコミットしてくれていて、良いところをすごく探してくれるのですが、若い世代が流出しているということは、香川の人材が他県にコミットしている状態のような、香川の学生はそんなに香川にコミットしていないような少しつらい状況なのかとも思ったりしました。そういった減点がない分、「伸びしろしかない」という意見も出たので、そこをこれから皆さんといろいろと意見交換できたらと思っています。

【テーブル3】

このテーブルで話した内容なのですが、まず若い人たちが残ってくれるようなまちというところで、例えば、県内の若い子たちが就職するときにまた戻ってくれるようなまちということで、地元には何か魅力的な企業やこういう企業があるということを知るための、学生と企業がつながれるような場所があるようなまちという話が出ました。あと、先ほども話に出たすごく楽しいまちとして、まちで音楽が流れていたりだとか、さっきおっしゃっていた屋台があったりだとか、すごく楽しめるまちだったり、楽しいキャンプ場があったりだとか、すごくアクティビティができる場所だったりとか、いろいろなレジャーがあるようなまちということも意見が出ました。高松のまち自体がすごくコンパクトでどこにも行けるということは、みんな分かっていることなので、それプラス楽しめるようなところがあったら良いのではないかという話になりました。あと、県外に行った人が戻ってくるために、刷り込みではないですが、小さいころから高松はすばらしいまちだということを伝えて、小さいころからも自分のまちが好きになることがすごく大事という話も出てきたので、大人たちが自分のまちを自慢できるような発信をするようなまちづくりが必要なのではないかという話になりました。

【テーブル4】

先の二つのテーブルでも、高松を自分が住みたくなるまちって観点で見ると、減点するところがないという話があったと思うのですが、このテーブルも同じ話になりまして、例えば、アクセスも車があれば、とりあえずどこにでも行けるし、子育ても治安が悪いわけじゃないという話が出たのですが、席替えの後には、それって恋人に例えたら、別れる理由がないだけだという観点の話になり、すごく腑に落ちました。別れる理由はないので、ずっと一緒にいるのは良いのだけれども、年取ってから浮気するのではないかということで、旅行をすとか、いずれどこかに移住してしまうとか、高松じゃないといけない理由としてはちょっと弱いのではないのかという話になりました。その要因として考えられるのが、やっぱり高松の良さを対外的にPRできていないということで、人を呼び込むに当たって、定住するとしても、PRが弱いのではないかという意見が出てきました。つまり、クリエイティブな方やエンタメの業界の方たちに対して、高松の企業や大人たちが、そこに対する投資が少し弱いからではないか、そこを打ち出していけば、高松の良さを打ち出していくことができるのではないのかという話になっていきました。

【テーブル5】

このテーブルで出てきた意見も、やっぱり、これまでの4テーブルの意見と同じように加点ポイントがないことなのかなと感じました。じゃあ、どんなまちが住みやすいまちなのかと考えたときに、それぞれの地域にとがったところがあるまちが住みやすいまちなのではないかということで、例えば、スポーツがしやすい場所があったりとか、自然を感じられる場所があったりということです。全体的に言うと、子育てはどこでもしやすい方がいいけれど、この地域は飲み屋があってお酒が好きな人が楽しく飲める地域があるなど、それぞれの地域でとがったところがあるまちが住みやすいまちで、なおかつ、地域ごとにその地域の人たちが、この地域はこれが強みだということが分かってそれをPRできるということも、もう一つ大事なことでないかなと考えました。

【テーブル6】

このテーブルの前半のところで出た意見としては、まずは、人との程よい距離感というのが一番に必要ということで、全国的な中でも、都会のように、ある程度、密にならずに、程よい距離感で人と接していきたいというところが大きな点として出ました。それに伴って、様々な本屋や飲食店、古着屋などの全国的にあるようなお店にも、1人で住んでいても徒歩圏内で行けたらいいなというような

話が出たところです。後半に主に出た意見としては、みんなでつながるためのコミュニティになるような場が欲しいということで、そういったコミュニティの場を知るために、発信する方の発信力も大事だということで、その発信力を高めるために、高松の中でもコミュニティ活動ができるようなツールやアプリを作ったらどうかといった意見が出ました。その一方で、人とあまりつながりたくない方もやっぱりいらっしゃるので、全然、具体的ではないのですが、そういう方への受け皿というか、何か支援策になるようなところやサポートできる力も欲しいという意見がありました。また、他のテーブルの意見として屋台の話がありましたが、このテーブルの前半に出た話に戻るのですが、大阪でもそうですが、高松の商店街のメインストリートの南北の商店街だけでなく、その東側のライオン通りのような表じゃないストリートとかにもしっかり注目して、実はそこにも魅力があり、プラスそこから入る路地裏もしっかり盛り上げて、表に出していきたいというようなことも意見としてありました。

【委員】

6つ全部のグループから発表していただきましたが、発表した人が言わなかったけど、こういう意見が出たというのがありますか。私がいたグループでは、子育て世帯として今住んでいる地区がすごく密になっていて、その学校はすごく人が多いのに、隣の地区の学校に行ったら1クラスしかない学年があったりします。子育て家庭が増えていくと、すごく密な小学校になっていき、ストレスが高くなるし、運動場とかも使いにくい状態になっているので、教室もいっぱい余っている地区に分散させるために、とがったところのある地域の話になりました。スポーツやダンスで有名な地区だとか、徳島県の神山町みたいにIT関係の仕事の人をたくさん呼んで、その人たちの子どもたちが小学校にいっぱいいるような状態を作るといったことです。移住をしようとしているときに、例えば、不動産屋さんのおすすめの地区にみんなが住むようになると、その地区の中学校ばかりが膨らんでいって、子どもたちにとっては、すごく息苦しいし、過密になるので、今のコロナ禍の時代には、すこし違うのかなというような状態になっています。子育て世帯にとっての住みやすいところがすごく偏っていると思うので、とがった地域の話になりました。

では、少しまとめてみましたので振り返ってみると、住みやすい場所や住みたくなるまちとして高松じゃないとだめな理由を作るには、「楽しさ」というキーワードが出たかと思います。路地裏やライオン通りの魅力、屋台、音楽が流れている、キャンプ場、こういう加点ポイントの楽しさをもっと増やしたらいいので

はないかという意見が出ました。あと、「何でもちょうどいい感じだけど、別れる理由がないだけなのでは」という話も出ました。この意見が出たグループの中には、ずっと住んでいる人と移住してきた人の両方がいると思うのですが、私もずっと高松に住んでいるのですが、何で高松に住んでいるのかって聞かれたら、生まれたからとか、他に行く理由がないというものだけになってしまうのですが、もっと良さを探して、学生や子どもに伝えることによって、県外に行った学生が戻ってくるのではないかと意見が出ました。つまり、高松じゃないと駄目な理由を作るには、もっとPRに投資することが大事で、小さな地域ごとにとがったところを作っていく、個性を出して、あのまちに住みたいと思えるような特色を出していくことが挙げられました。

あとは、このU40もそうですが、そういったことをするためのコミュニティの場をどんどん作ったほうがいいのではないかと意見や、でもつながりたくない人の支援策ということも必要ではないかと意見も出ました。このU40は、コミュニティをしたい人が集っていると思うのですが、やっぱり、学校行きたくない、会社行きたくないといった人たちが、例えば、人が少ない所に住んでもらうなどして、気持ちよく人との距離感を空けて過ごしてもらえる場所として、人が住んでない所を利用してできるのではないかなと個人的に思いました。

【会長】

本日の会議は、前回と打って変わって、とてもポジティブな感じで大変良かったと思っています。じゃあ、我々は、これから何をしていくのかというところは、まだ定まっていないのですが、きっと、こういう議論を交わしていく中で、やりたいことや、それをやっていくための熱量というのが育ってくるのかなと思っています。今回、本当に想像以上に面白いアイデアやヒントがありました。また、高松市にも男木島という人口が増えている島があるので、そこを解明することも、1つ分かりやすい身近な事例だと思いました。

我々としては、高松市は非常にポテンシャルがあるのではないかと考えているので、おそらく、そこを見えるようにしていく、情報を伝えていくということが重要ではないか。もしかしたら、いわゆるデジタルネイティブの世代、20歳とか10歳代の子たちの力を借りながら、私たち40歳未満の世代だからできることがあるかもしれないなと強く感じました。そう考えると、このU40という組織は、非常に貴重な組織になるのではないかなと思います。

少し御紹介したいのですが、今日、傍聴に参加してくださった学生の御二人

は、香川大学創造工学部の造形・メディアデザインコースというところで、いわゆる、何かをクリエイティブに形にして価値を作るとか、その価値や情報を伝えるとか、そういったことを勉強している方々です。彼らがやっていること、それこそが高松市で足りないピースであったりするのではないかと？そう思い、御声掛けさせていただき快く傍聴に来てくれました。こういった形で、U40のメンバーのみならず、色々な方を巻き込んで、じわじわと、「住みたいまちとは？」といったような議論を伝えていくことにも価値があるのではないかと思います。

最後に一つお伝えしたいこととして、情報発信を始めていくということです。試験的に、前回の第1回会議の内容をまとめ、「note」という情報発信の媒体で文書を書かせていただきました。これは、私だけでなく、持ち回りで、皆さんに書いていっていただきたいと思っております。「note」が誰に伝わるのかとかいったところは、もっともっと議論をする余地があると思いますが、まずは、第一歩ということで、始めていくこととそこを考えていくことを始めていけたらと思います。

今年度の会議は今日で終わりになり、来年度は5回集まる機会がありますが、逆に言うと5回しかありませんので、是非、熱量が冷めないうちに分科会を挟んでいくなど、そんな話もできたらなと思っております。

3 閉会

(事務局から事務連絡をして閉会)